

朝のこない夜はない

見<sup>み</sup>返<sup>かえ</sup>りを求<sup>もと</sup>めず

世<sup>よ</sup>のため、  
人<sup>ひと</sup>のために……

山首 鈴木正修

魂たましいを磨みがく道みち

忘年会ぼうねんかいでの出来事できごと

ずいぶん前のことですが、名古屋地区の忘年会の席で、亡くなられた赤塚さんから「正修上人、あんたはこの世に何しに来やあた」と聞かれたことがあります。その時は面食らひまして、考え込んでいましたら赤塚さんが「私は丁稚奉公で名古屋に来た14歳の時にこの質問を杉山先生にされた。私は『働きに来ました』と答えた。すると『そうか。よろしい』とお褒めの言葉を頂いた」ということでした。14歳なのになんてすばらしい答えを言

われたのだと感心しました。

それ以来、何度も赤塚さんに「正修上人、何しに来やあた」と聞かれましたが、私も答えを覚えてしまつて「働きに来ました」とお答えしておりました。

魂たましいを磨みがく

我々はこの世に何をしに来たか

これは重要な課題です。いろいろお考えになられると思いますが、正しい答えは「魂を磨く」ためです。この世に生を受けて来た時

より魂を磨いて次の世に持つていかなければなりません。一説によると、我々一人一人がそれぞれ「こういう努力をして学び、魂を磨く」という課題をもつてこの世に生まれてきているのだそうです。

この世ではどんな人でも病気になる身近な人の死に出会ったり、いろいろな試験に出会います。その試験にその時々、真摯に答えを出していくことが大事です。

ナチスドイツの Ауシュビッツ強制収容所から生還を果たした有名な心理学者のビクトール・フランクルは「どんな時にも人生に対して真摯に答え、逃げてはいけない。そうすることによって人生は開けていく。逃げるこ

とよってはまったく開けない。病気だろうが、困ったことだろうが何だろうが真正面から受け止めて、乗り越えていかないと人生は意味をなさない」と言っています。

フランクルの考え方は、あの アウシュビッツの中の考え方ですが、あの アウシュビッツの中で人々は、人生に何も期待を抱くことはできませんでした。また、自分以外の人に何も期待できないという絶望感にさいなまれていました。その場にあつて「こういう八方ふさがりの困った状況も我々に課せられた試験であり、課題なんだ。これに答えていかなければいけないんだ」とフランクルが言うと、周りの人は口を揃えて「一体どうやって応えるん

だ。誰も助けに来てくれないし、何ともしよ

うがない。明日殺されるかもしれない。そう

いう状況で何が課題に比べられるというのだ」

と言いました。するとフランクは「君たち

はいつも何かをしてもらおうと期待している

だろう。そうじゃない。『自分が世の中から

何を期待されているか』を考えろ。そうした

時に自分の役目というものが見つかる。自分

のしなければいけないことが見つかる。こん

な状況でも自分がすべきことが見つかるん

だ」と励ましました。そうしてフランクも

周りの人々も「この困難な状況でも何か切り

開くための道はある。何か自分には生きる意

味があるんだ」ということを見出して、答え

を出しながら生きてさうです。

今の世の中で我々がこういう状況になるこ

とはまずありませんが、日常生活の中で腹

の立つこと、嫉妬することなどいろいろ起こ

ります。杉山先生は「どんな時でも堪忍」と

言われたのですが、これも課題なのです。腹

の立つことが起きた時に堪忍できるかどうか

が、魂を磨くための課題と言えます。

また「嫉妬」ということですが、たとえば

誰かが成功してうまくいっている時など、嫉

妬心が起きやすいものです。「うらやましい

な」と思っているうちはいいのですが、その

うち「今度はうまくいかなければいいのに」

と思ったりするものです。そういう、誰かが

成功せいこうしてうまくやっている時とき「良かったね」と心こころから言いえるかどうか、これが課題かだいと言いえます。その時とき「今度は失敗しっばいするといいのに」とか「いつか病気びやうきでもすればいいのに」ということを思おもうと、これは「課題かだいをうまくクリアアしていない。答えこたを出だしていない」ということになります。

—— マスターズでの出来事 ——

毎年まいとし4月がつの第2週だいしゅうに、アメリカのオーガスタナシヨナルでおこ行おこなわれるゴルフのマスターズという大会たいかいがあります。今年ことしの試合しあいでアダム・スコットという若手わかての選手せんしゅとアンヘル・カブレラというベテランの選手せんしゅが同スコアで

並びならび、プレーオフになりました。プレーオフの2ホール目でカブレラ選手せんしゅがセカンドショットを打うち、少し遠とこかったのですがグリーンに乗りのりました。次にアダム・スコット選手せんしゅが打うったショットはピンの近くちかに行いきました。私わたしがカブレラ選手せんしゅだったら、ゴルフで一番栄ばんえい誉よのある試合しあいなので絶対ぜったいに勝かちたいですから「ああ、やられたな」と思おもうに違ちがいありません。ところがカブレラ選手せんしゅは違ちがいました。「ナイスショット」と大おおきな声こえで言いったのです。「こんな場面ばめんで相手あいてをほめることができるなんてすごいな」と思おもいました。すると、言いわれた方ほうのアダム・スコット選手せんしゅは親指おやゆびを立て、  
「ありがとう」という合図あいずをしました。こう

いうスポーツマンシップはいいなと思います。

ある本で読んだことがあるのですが、「ナスシヨット」と声を掛ける時、相手を心からほめることができる、自分も次に良いシヨットを打ちやすくなるような精神状態になるのだそうです。ですから、ゴルフだけでなく他のことでも、誰かが成功した時、心から素直に「すばらしいですね」と言うことができる、自分もそういう状況になりやすい精神状態になるのだらうと思います。

逆に、人の成功を妬んで「今度は失敗すればいいのに」と思ったり言ったりすると、自分がそうなりやすい状況を作ることになります。

—— 悪世に生まれて広くこの経を演ぶる ——

人はそれぞれこの世に、いろいろな課題を持って生まれてくるのですが、生まれつきハインディキャップを持って生まれてくる人がいます。皆さんご存知の乙武洋匡さんは生まれた時から両手足がありませんでしたが、非常な努力によって、またご両親や周りの方々の協力によって、普通の人以上の社会活動をしてみえます。

最近私を知った佐野有美さんという人、乙武さんより若い女性ですが、乙武さんと同じように両手足がありません。その佐野さんが今、プロの歌手として、年間百回以上も全国で公演をして大活躍してみえます。

佐野さんは特別な学校に行かず、小学校・中学校・高等学校と、健常者と同じ学校に行かれました。なんと、両手足がないのに百メートルくらい泳ぐこともできるそうです。家族や先生、友達の協力のできるようになったのですが、普通、両手足がないのに泳げるなんて考えられません。佐野さんは、どんな時もあるべきでない精神の持ち主だったのです。

この人の一番の特徴は、明るいということ。どんな困難な試練があっても明るいのです。高校時代には両手足がないのにチアリーダーをしてみえました。車いすに座っていたのですが、この人が笑顔でいるだけで、みんなが盛り上がったと言います。今はプロの

歌手として何をしているかというところ、全国を回って人々を励ますことをしてみえます。世の中の人の、両手足がない、一級の障害をもつ佐野さんが励ましてみえるのです。すごいなと思いましたが、励まされました。励まされるならわかりますが、励まして回っているのです。

佐野さんとか乙武さんの話を見たり聞いたりする中で思ったのが、法華経の法師品に説かれることです。

「法華経をこの世に真に弘める人は、清浄なる業報を捨て、本当は徳が高いのにそれを天に預けてわざわざ濁悪な世に来る」

乙武さんや佐野さんはこういう人だと思えます。本当はそんな不自由な体でこの世に生

まれて来る必要はないのに、我々に人生の本  
当の意味を知らしめるために、わざわざそう  
いう体になつて生まれてみえたに違いありま  
せん。

### —— スウエーデンボルグの体験 ——

スウエーデンが生んだ大科学者であり大神  
秘家のエマヌエル・スウエーデンボルグとい  
う人が、今から250年以上前、生きながら  
に霊界を見てきたと言っています。我々と同  
じように普通の生活をしながら、天国とか地  
獄を見てきたと言うのです。その様子が何冊  
もの本になっています。

その中に興味深いことが書いてありました。

天界にいる人たちは「未開人」が多く、この  
世ですごい難行苦行をした人たちはあまりい  
ないということでした。理由は、この世で難行  
苦行をして、死後あの世にいった人たちは、  
「自分たちはこの世で苦行した報酬で天国に  
行けると思っていたのに、実際天国に行つて  
みるとそういう人はほとんどいない。『何だ、  
違ったな』と思つて天国から去つて行く」と  
いうのです。さらに「無学だが、素朴な人た  
ちの集まつた天界で彼らを見た時、彼らの姿  
は光り輝いていた。私がここで最も印象に残  
つたのは、外面の物がきれいに拭い去られ、  
最高位の霊に導かれて彼らが暮らしていたこ  
とである。彼らは人間だった時には無学だつ

たとは言え、今は有名な学者などより高い知恵に満ちていた。難行苦行したとか、すごい学問を修めたという人よりずっと輝いて見えた。なぜかという、その『未開人』たちは『ただただ人に親切にしよう』とか、『人を励まそう』ということだけを考え、それだけで生きてきた人たちで、何かをして、それによつて自分たちは天国に生まれたいとか『報酬』といったことは一切考えない人たちだつた。だからそういう人たちは一番上の天国にいるのだらう」と書いています。そして、そ

の天国にいる最高位の霊から「時が下るにつれて次第に悪い時代になっている。だから最上の天国に至れる霊は時代とともに少なくなっている」と聞いたということです。

要するに、文明が進歩すればするほど人間が下劣になつたということ、最高位の霊が言っているのです。

素朴に、世のため人のために見返りを求めず何かをすることが、魂を磨く一番の方法と、ということになるのだと思います。